

Title	芥川龍之介の伝説話関連作品の研究
Author(s)	高, 子瑜
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/89587
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (高子瑜 (GAO ZIYU))

論文題名

芥川龍之介の仏伝説話関連作品の研究
—典拠の解明を中心に—

論文内容の要旨

本研究は、芥川龍之介における仏教関連作品の一部、つまり釈迦関連作品に目を向けて、五つの仏伝説話関連作品を対象として、典拠の解明という視角を中心に、また、作品の位置付け、芥川の他の作品との関連、作品の主題などの諸問題も視野に入れつつ、芥川と釈迦関連文学に関する考察に取り込んだものである。

芥川における仏教関連作品を大まかに分類すれば、二系統の作品群に分けられると思われる。一系統となるのは、舞台が昔の日本とされており、主人公として日本の歴史上の人物が多く選ばれているという作品群である。一方、舞台が昔のインド（或いは極楽、地獄など）とし、仏教的世界の人物を作中人物に選択しているという作品群がもう一つの系統を成している。先行研究を見ると、前者の作品群に関して考察が盛んに為されてきたのに対して、後者の作品群への注目と関心は乏しい。

読書遍歴から見て、芥川は釈迦に関わる伝説、事跡などに興味を抱いていたことは間違いない。また、彼の文学世界では、しばしば釈迦関連文学に取材して自分のものとしている。そのため、本研究では、彼の釈迦関連作品に目を向けて考察に取り組もうとする。具体的に言うと、釈迦にまつわる内容が作中に占める比重が高い五つの作品、つまり「全印度が……」（小説未定稿、生前未発表、一高時代執筆と推定）、「戦遮と仏陀」（戯曲未定稿、生前未発表、大学時代前後執筆と推定）、「蜘蛛の糸」（小説、『赤い鳥』、大七・七）、『井月の句集』跋文（跋文、『井月の句集』、大一〇・一〇）、「尼提」（小説、『文藝春秋』、大一四・九）を研究対象とする。

管見の範囲では、『芥川龍之介大事典』（勉誠出版、平一四・七）で立項されている項目「釈迦」を除けば、芥川の釈迦関連作品を系統的に考察する研究を見出せない。芥川は如何なる釈迦関連文学に接していたか、釈迦関連文学のどこに注目していたか、釈迦についてどう認識していたかなどの諸問題がまだ究明されていない。芥川の宗教関連文学の中で、キリスト教関連作品の研究のほうが多岐にわたる論点から深く掘り下げられてきたという現状のもとで、本研究により、芥川の仏教関連作品への注目度を上げると共に、芥川と仏教、芥川における仏教文学の受容という課題に貢献することができればと思う。

本研究は「序章」「終章」を含めて全七章によって構成されている。以下で各章の概要を説明する。

序章

序章では、芥川文学における釈迦関連著述の全体像を把握するために、まず、芥川が残した著述から、できるだけ多くの釈迦関連著述を網羅して一覧表で整理した。その一覧表にある二十四編の著述から、釈迦にまつわる内容が作中に占める比重が高い五つの作品を研究対象に選定した。そして、その五作品をめぐる研究内容、及び本研究の目的などを簡潔に述べた。

第一章「全印度が……」の諸典拠と位置付け

芥川には一般に知られる百四十余編の小説の他に、膨大な量に及ぶ未定稿作品も残っている。これら未定稿作品に関しては、現在までさまざまな文献資料で公開・紹介されてきた。その中で、「羅生門」と近い時期に執筆された、それと多くの共通点が見られるとされる「全印度が……」という未定稿作品が残されている。第一章では、この「全印度が……」を取り上げて、その諸典拠と位置付けをめぐる考察を行った。

まず、芥川のノート「貝多羅葉」にある関連メモの翻刻と検討によって、芥川が堀謙徳編の『美術上の釈迦』（博文館、明四三・一〇）から書き記したメモ群を「全印度が……」に活用したことを明らかにした。そして、先行研究を踏まえて、物語の大筋や流れ、人物の設定などの相似性、及びノート断片と芥川の文章を検討し、芥川がロシア作家のアンドレーエフ著「歯痛」（森鷗外訳、『趣味』、明四三・三）を模倣して「全印度が……」を書いたことを証明した。さらに、「全印度が……」と「歯痛」の相違点も分析し、相違点の核心部分を究明した。それは、主人公における釈迦／キリストの救済への懐疑である。そして、木下杢太郎「印度王と太子」（『三田文

学』、明四三・五)については、芥川がその中の表現を一部借用する傍ら、釈迦の救済への懐疑という核心部分が、「印度王と太子」における沙門伽闍と太子の対話などに触発された可能性があることを提示した。最後に、諸典拠の出版年月によって作品の執筆時期を推定し、当時の芥川と文壇の状況を考慮に入れながら、この作はどの位置付けられるべきかについて私見を述べた。

第二章「戦遮と仏陀」の典拠、及び「奉教人の死」との関連

第二章では、もう一つの未定稿作「戦遮と仏陀」を取り上げて、その典拠問題を検討し、また、芥川の切支丹物の代表作である「奉教人の死」（『三田文学』、大七・九）との典拠や構成上での繋がりも指摘した。さらに、「奉教人の死」の典拠について新たな可能性に簡単に触れた。

まず、未定稿戯曲「戦遮と仏陀」に関しては、芥川が用いた典拠は、先行研究に指摘されている堀謙徳著『解説西域記』（前川文学閣、大一・一一）ではなく、堀謙徳編『美術上の釈迦』（博文館、明四三・一〇）の中での「妖女の謀計」であることを明らかにした。また、「妖女の謀計」との比較対照により、「戦遮と仏陀」は芥川の唯一の戯曲「青年と死」と場面の造形で相似している一面があることをはっきりとさせ、当時の芥川の戯曲創作への熱意の一端を明示した。そして、先行研究に指摘されている一連の類話の関連性に基づいて、従来注目されていなかった「戦遮と仏陀」と「奉教人の死」との典拠や構成上での繋がりを指摘した。その繋がりをまとめると、一連の類話が存在していることが示すように、「戦遮と仏陀」と「奉教人の死」が「妊娠に関する偽りと非難」という点で共通していることは偶然ではなく、それぞれ材を仰いだ仏典上の戦遮説話とキリスト聖人伝中のマリナの話はその典拠を遡ると、共に古代インドの仏教説話集の『ジャータカ』に記されているチンチャー説話に帰するからであると考えられる。最後に「奉教人の死」の典拠に関しては、中国の文学者・馮夢龍が編纂した『警世通言』（一六二四年刊行）に所収されている巻七「陳可常端陽仙化」から影響を受けたかどうかという点で検討する余地があることを示した。

第三章「蜘蛛の糸」の典拠

続く第三章では、芥川の最初の児童文学の「蜘蛛の糸」を取り上げ、まず、その典拠とされるポール・ケーラス原著、鈴木大拙訳『因果の小車』（長谷川商店、明三一・九）について、芥川の入手の経緯を詳しく分析した。そして、新たに見つけた鈴木正三著、羽場順承新訂『実録因果物語』（大文館、大七・二）という書物を検討することによって、「蜘蛛の糸」の典拠を追究し続ける必要があることを指摘した。

「蜘蛛の糸」に関して、『因果の小車』所収の「蜘蛛の糸」が典拠であることがほぼ定説になっているが、芥川が『因果の小車』を入手した経緯について不明の点が残存している。芥川「蜘蛛の糸」を典拠『因果の小車』の本文と比較し、字句までの類似性を考慮すると、神代種亮の文章における芥川の発言をそのまま信用できないことが分かる。また、後年芥川は、自分の蔵書のラーゲルレーヴ著『キリスト伝説集』の英訳本『CHRIST LEGENDS』（一九〇八年刊行）の中で「我が主とペトロ聖者」という「蜘蛛の糸」の類話に接するが、その以前から、芥川は自作の「蜘蛛の糸」（或いはその典拠『因果の小車』の中の「蜘蛛の糸」）を仏伝説話だと思い込んでいたために、自分の蔵書『CHRIST LEGENDS』で、一見すればロジックの矛盾となっている読後メモを書き残したと推測している。

一方、読後メモが提示しているロジックの矛盾を解消できる他の解釈として、芥川が直接触れていた典拠は、「西」との関わりが説明されている「緒言」「小伝」が付された『因果の小車』原書ではなく、その中の「蜘蛛の糸」だけが転載された他の何かの書物であると、一つの仮説を立ててみた。例えば、『実録因果物語』という書物の最末尾には、「附録」という見出しのもとで、『因果の小車』の中の「蜘蛛の糸」が「因果之小車」という表題で再録されている。ただし、『実録因果物語』を芥川「蜘蛛の糸」と比較対照すると、『因果の小車』のほうが芥川の「蜘蛛の糸」と近似している。しかし、『因果の小車』の「蜘蛛の糸」が『実録因果物語』に転載されたという事実を踏まえるなら、他にも転載された書物はないか、芥川「蜘蛛の糸」の典拠を追究し続ける必要があると思われる。

第四章『井月の句集』跋文における仏伝説話の典拠

第四章では、芥川の主治医であった下島勲が編集した『井月の句集』（空谷山房、大一〇・一〇）に光を当て、芥川が執筆した跋文における仏伝説話について、彼がどこからそれを借用したかを、可能な限り明らかにした。

先行研究では、その仏伝説話の典拠は『増一阿含経』巻第二〇の第四経だと指摘されているが、芥川と『増一阿含経』（阿含経）との繋がりについて触れられていない。本研究は補足研究として、まず、芥川と阿含経の関わりを検討した。結論とすると、跋文の執筆時点（大一〇・一〇・二）の前後で芥川が阿含経に接した手がかりは見当

たらないが、彼が実際に読んだ阿含経関連の書物の『原始仏教思想論』（丙午社、大一一・四）、及び後年の遺書「或旧友へ送る手記」（昭二・七）の中の記述を考察することで、芥川が阿含経に関する知識を持っていたと断定することができた。特に遺書「或旧友へ送る手記」の中の記述を検討することにより、芥川は仏伝説話の典拠が所在する『増一阿含経』巻第二〇の内容に触れた可能性が高いことが分かる。

一方、仏典から、仏典ではない他の仏教書物に目を向けると、跋文における仏伝説話に類似する話が記されている万亭応賀著『釈迦八相倭文庫 31-65編』（金松堂、明一八・四）、平田篤胤著『印度藏志未定稿』（『平田篤胤全集』第一五巻、法文館書店、大七・五）という、芥川と関連がある両書があることに気付いた。跋文における仏伝説話と比較対照した結果、この両書は何れにも典拠としての重要な用語が欠けていることが分かる。つまり、この両書は直接的典拠である可能性が低いと認識することができる。ただし、比較対照の過程で明らかになった、跋文の仏伝説話における芥川の独自の用語を見ると、彼が直接参考にした典拠が、阿含経仏典ではなく、その仏伝説話を記した上掲の両書のような他の仏教書物である可能性も相当残っていると考えられる。

第五章「尼提」の典拠と主題に関する再考

芥川文学において、「尼提」は芥川生前の最後の短編集である『湖南の扇』（文藝春秋社、昭二・六）集中唯一の歴史小説として、また、芥川の一連の今昔物の最後の作として、もっと注目されるべきだったと思われるが、残念なことに、発表当時でも現在でも見逃されてしまっている現状なのである。第五章では、この「尼提」を取り上げて、その典拠と主題に関して再考察を行った。

その典拠に関しては、『今昔物語集』、及び仏典との関連が考えられてきたが、本章では、常盤大定編『仏伝集成』（丙午出版社、大一一・一）の「尼提」と比較し、特にそこにある独特な表記などを検討することによって、『仏伝集成』が直接的典拠であることを示した。そして、この小説は『今昔物語集』などの二番煎じで、特に新味が付加されていないと過小評価されてきたが、本研究では、初めて直接的典拠と比較することにより、全体としては典拠の大筋から変えたことが少ないが、様々な加筆・変更を施して尼提話の展開を合理化した点、仏教教訓的な箇所を削除して教訓臭のある仏教説話を近代的小説に改作した点、終局部で尼提と給孤独長者の遭遇話を付加し各自の内心を点出した点などにおいては、芥川の手腕が十分見えることが明らかになった。最後に、作品の主題について、従来の論では外縁の事情との関わりからその主題を論じる傾向が強かった。本研究では、作品そのものの内容に立ち返り、特に芥川「尼提」にしかない終局部で描かれている尼提と給孤独長者の心理を明らかにすることによって、芥川が人間性に隠蔽されている醜悪さを批判しているのではないかと論じており、「尼提」一編の主題の解明を試みた。

終章

終章では、まず前の各章の結論をまとめた。そして、そこで触れていなかった内容を合わせて、芥川と釈迦関連文学について総合的に概観した。最後に、本研究で残された問題点と今後の課題について述べた。

芥川と釈迦関連文学を概観すると、幼少時代の愛読書である草双紙の『釈迦八相倭文庫』から、晩年に読んだ仏伝文学書の『仏伝集成』まで、芥川が生涯にわたって様々な釈迦関連文学に接したことのみならず、中学時代の作文の「釈迦」から生涯末期の歴史小説「尼提」まで、数多くの釈迦関連著述も書いたことが分かる。そして、芥川が触れていた釈迦関連文学の性格を考えると、彼が多様な説話集（仏伝説話集、仏教的説話集、或いは釈迦一代記（絵本、読本））などによって釈迦関連文学に接していたと言える。この点に即して言えば、芥川が釈迦関連文学に関心を寄せるのは、仏法（仏教の教訓）を求めるわけでもなく、仏教信仰に近づくわけでもなく、その説話性（筋の面白さ）に惹かれたためではないかと考えられる。

一方、芥川の釈迦への眼を分析すると、自分の釈迦関連著述の中で、芥川が釈迦の形象を造形する際に、意図的に釈迦を仏教教義上の絶対的超越者ではなく、現実を生き延びた温もりのある人間のひとりとして造形していくという傾向が見られる。これは仏伝説話集の影響が推定される以外、同時代文学からの刺戟も考えられる。また、初期の作品から晩年の作品へ、釈迦関連著述の中にある芥川の釈迦の救済への眼は変化を呈している。晩年の芥川が仏教に接近した姿に鑑みて、ある意味で言えば、これは芥川における仏教の救済への認識の変化を示唆しているかもしれない。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (高 子 瑜)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	五之治昌比呂
	副 査	准教授	柴田芳成
	副 査	准教授	水野重紀子
	副 査	教 授	岩井茂樹
	副 査	准教授	松村薫子

論文審査の結果の要旨

提出された論文「芥川龍之介の仏伝説話関連作品の研究―典拠の解明を中心に―」は、芥川龍之介の釈迦関連作品に注目し、五つの仏伝説話関連作品を対象として、典拠の解明を中心に、典拠との比較、作品の解釈、芥川の他の作品との関連といった諸問題に取り組むものである。論文の構成は、序章、第一章、第二章、第三章、第四章、第五章、終章からなっている。

序章では、芥川龍之介の著述からできるだけ多くの釈迦関連著述を集め、一覧表にして整理している。そこにある24編の著述から、釈迦にまつわる内容の比重が高い五つの作品を研究対象にすることが述べられる。そして、その五つの作品についての研究内容、および論文全体の研究目的がまとめられている。

第一章では、「全印度が……」という未定稿の小説を取り上げ、新たに発見した材源を提示し、従来指摘されている材源とともに作品との比較を行い、書かれた時代を考慮に入れて作品の位置づけを試みている。まず、芥川のノート「貝多羅葉1」にある関連メモの翻刻と検討によって、芥川が堀謙徳編『美術上の釈迦』（明43）から書き写したメモ群を「全印度が……」に活用したことを明らかにしている。そして、先行研究を補強することで、芥川がアンドレーエフ「歯痛」（森鷗外訳、明治43）を模倣して「全印度が……」を書いたことを証明し、相違点の分析により、「全印度が……」の主題の一つは釈迦の救済への懐疑であると結論づけている。また、類似表現が存在することから、芥川が木下幸太郎の戯曲「印度王と太子」（明治43）も参考にした可能性を指摘し、「釈迦の救済への懐疑」という要素も共通していると主張している。最後に、執筆時期を明治43年かその直後と確定することにより、この時期の反自然主義運動に芥川が注目していたこと、「全印度が……」の創作方法が「羅生門」などの後の作品を予見させるものであることを指摘している。

第二章では、未定稿戯曲作品「戦遮と仏陀」を取り上げ、新たに発見した典拠を示し、さらに芥川の「奉教人の死」（大正7）との繋がりを考察する。「戦遮と仏陀」の典拠については、先行研究では堀謙徳『解説西域記』（大正元年）が指摘されているが、堀謙徳編『美術上の釈迦』（明治43）の中の「妖女の謀計」の節こそが直接の典拠であることを明らかにしている。次に「妖女の謀計」との比較により、「戦遮と仏陀」は芥川の唯一の戯曲「青年と死と」（大正3）と場面の造形で似ている面があることを指摘している。そして、先行研究で指摘されている一連の類話の関連性を踏まえると、「戦遮と仏陀」と「奉教人の死」は典拠や構成上で繋がりがあると主張している。その繋がりは、仏典上の戦遮説話とキリスト聖人伝中のマリナの話が、典拠を遡ると『ジャータカ』に記されているチンチャー説話にたどり着くことによるという。最後に、「奉教人の死」に関して、馮夢龍編『警世通言』（1624）の巻七「陳可常端陽仙化」から影響を受けている可能性を検討する必要があると主張している。

第三章では、児童文学の「蜘蛛の糸」を取り上げ、その典拠とされる『因果の小車』の入手経緯について分析し、典拠の可能性のあるものとして新たに見つけた書物を検討することにより、「蜘蛛の糸」の典拠はまだ追求する余地があることを主張している。「蜘蛛の糸」の典拠は、ポール・ケーラス原著、鈴木大拙訳『因果の小車』（明治31）所収の「蜘蛛の糸」であるというのが定説である。しかし、『因果の小車』を芥川が入手した経緯については不明な点がある。「蜘蛛の糸」を『因果の小車』の本文と比較し、字句の類似性を考慮することで、神代種亮が伝える芥川の発言はそのまま信用できないことを明示している。また、後年芥川が蔵書のラーゲルレーヴ『キリスト伝説集』の英訳本に書きこんだメモから考えると、芥川は自作の「蜘蛛の糸」（あるいはその典拠の『因果の小車』の「蜘蛛の糸」）を仏伝説話だと思い込んでいたのではないかと主張している。その可能性を補強するものとして、鈴木正三著、

羽場順承新訂『実録因果物語』（大正7）という書物を新たに発見して紹介している。ただし、この書物の文章と芥川の「蜘蛛の糸」を比較すると、それが典拠である可能性は低いことがわかる。そうではあっても、『因果の小車』の文章を転載した同様の書物が存在する可能性があることを、検討する必要があると主張している。

第四章では、下島勲が編纂した『井月の句集』（大正10）のために芥川が執筆した跋文に目を向け、そこに記された鹿頭梵志説話について、その典拠を可能な限り明らかにしようとする。確実な典拠を特定することはできなかったが、芥川と阿含経の繋がりからして、仏典の『増一阿含経』の可能性が最も高いという結論にいたっている。また、跋文の鹿頭梵志説話に類似する内容が記されているものとして、万亭応賀『釈迦八相倭文庫 31-65編』（明治18）と平田篤胤『印度蔵志未定稿』（『平田篤胤全集』第十五巻、大正7）という、芥川と関連がある二つの書物を紹介している。これらと跋文を比較対照した結果、両書とも典拠としての重要な用語が欠けている。ただし、比較対照の過程で明らかになった、跋文における芥川の独自の用語を見ると、彼が直接参考にした典拠が、『増一阿含経』ではなく、鹿頭梵志説話を記した他の何らかの仏教関連書物である可能性も残っていることを指摘している。

第五章では、短編小説「尼提」を取り上げ、その典拠と主題に関して再考察を行っている。この作品の典拠については、従来『今昔物語集』、および仏典との関連が指摘されてきたが、新たに常盤大定『仏伝集成』（大13）という書物が直接的な典拠であることを実証している。また、この小説は「特に新味がない」とこれまで過小評価されてきたが、直接的典拠と比較することにより、初めて芥川の「尼提」の独自性を明らかにすることに成功している。とくに、終局部で尼提と給孤独長者が話をする場面を創作し、各自の内面を点出した点には、芥川の手腕が十分うかがえるという。最後に、作品の主題について、従来の論では外縁の事情との関わりからその主題を論じる傾向が強かったが、作品そのものの内容に立ち返り、終局部で描かれている尼提と給孤独長者の心理を明らかにすることによって、人間性に隠蔽されている醜悪さへの芥川の批判を読み取っている。

終章では、第一章から第五章までの内容を簡潔にまとめたあと、その部分では触れていなかった内容もあわせて、芥川と釈迦関連文学について総合的に概観している。最後に、本論文で残された問題点と今後の課題について述べて論文を閉じている。

本論文は、芥川の作品の典拠を明らかにすることを第一の目的としている。そのため、典拠の問題を論じる部分に重点が置かれ、典拠との比較や、比較によって可能になる作品の解釈に関しては、手薄になっていることは否めない。しかし、芥川研究においてあまり注目されてこなかった仏伝説話関連作品を包括的に扱ったこと、また、これまで知られていなかった新しい典拠を発掘し芥川研究に新しい資料と視点をもたらしたことは、きわめて高く評価できるであろう。

以上のような点をふまえて、論文審査委員会は、全員一致で本論文が博士（日本語・日本文化）の学位にふさわしいものであるという結論に至った。